

2006年のヨーロッパモビリティウィーク&カーフリーデーの状況報告

視察期間：2006.9.14～9.26

今年の日本からの参加は一昨年と同様、横浜、名古屋、松本の3市でした。わが国でも以前に比べると格段にカーフリーデーの存在は知られるようになりましたが、街づくり、環境面では世界の進み具合とスピードの点で大きく隔たりがあるようです。今年も正式参加がないため、ヨーロッパ各地の交通行政、モビリティウィークの取り組みについて視察を例年通り訪れてきましたが、こちらがとどまっている間にさらに引き離されていくことを例年以上に実感してきました。

●イタリア・ボローニャ

最初は、イタリアの優等生ボローニャを訪れました。「BO2^{*1}」をキャッチフレーズに積極的な都市交通政策を展開しており、2006年のヨーロッパモビリティウィークの賞の候補地でもありました。世界遺産の歴史的地区の環境保全に特に留意するため、昨年からはSIRIOという名称のカメラシステムで街中への自動車の流入規制を進めており、また、都市交通計画の更新も住民とのフォーラムを行いながら進めているときでした。モビリティウィークの催しは自転車、天然ガス自動車等の普及など充実したものでしたが、フォーラムの立ち上げもその一つでもありました。

●ベルギー・ブリュッセル

17日の日曜日は、街全体をカーフリーゾーンとしているブリュッセルを再度体験しました。昨年からは紹介しているとおり、地下鉄2路線がそっくり入る市全域(32km²)で、9月22日ではなくモビリティウィーク期間中の日曜日を全く自動車を使わない街とするすごさは、日本人々もぜひ体験してもらいたいものです。今年5年目の実施とのことですので、人々はもう慣れ親しんだ恒例のイベントというイメージでしょうか、郊外の人々は街のフリンジ部分の駐車場に自動車を置いて自転車に乗り換え街に繰り出し、大小の自転車で一緒に走る家族の風景はいたるところで見かけました。仲間ユニフォームをそろえて走るグループや自転車愛好会など、さながら自転車の日のようでもあります。公共交通は無料となり、中心部ではローラーやスケートボードなども目につきます。日



天然ガスのバス車両



自動車の流入規制を監視するカメラ



通常の中心部の様子



街全体をカーフリーゾーンとした日曜日の中心部の様子

BO2^{*1} ..Bolognaの「B」、Bioの「B」、CO₂の「O₂」で命名されたボローニャの都市交通計画

曜日は店舗がしまっているのに、純粋に都市空間を楽しむために多くの人が街に集まり、行きかっています。

●フランス・ナント

フランスでは、パリ、ナント、ボルドー、ラ・ロッシュェル、クレモン・フェラン、リヨンとヒアリングをこなしながら駆け足で見してきました。ナントの目玉は 11 月開業の BUSWAY で、基幹となる公共交通の第 4 路線として整備中の計画のお披露目でした。第 3 路線まではトラムでしたが、紆余曲折の末、高品質サービスを提供するバスシステム (BHNS) としました。日本では BRT と名づけそうなシステムですが、フランスの考える公共交通の基幹となる TCSP(公共交通専用空間)の交通手段の一つです。ルーアンの第 2 路線タイヤトラムの TEOR よりも沿道空間はよりトラムを意識した整備が進められていました。



モビリティウィークの展示ブース (メインは BUSWAY 紹介)



着々と工事が進められる BUSWAY (バス専用路線)

●ラ・ロッシュェルのカーフリーデー

今年の最大の目的は、「車のない日」を最初に訪れてから丁度 10 年目のラ・ロッシュェルでした。フランスではもうカーフリーデーは一応の役割は終えたと考えているのか、カーフリーゾーンを市民に訴える必要は既になくなったということでしょうか、正式参加はほとんどなくなりました。しかし、ラ・ロッシュェルは老舗の街として本格的なカーフリーデーをフランスで実施している数少ない都市のひとつです。日本のコーディネーターが来たというので 10 周年を迎える市のイベントに招待され、市長らと新しく整備された道路の開通式や、障害者・介護団体等とのこれから 10 年間で街のバリアフリー化の整備を進める調印式等に参列させてもらいました。その間、市長や地方議員等リーダーたちと市民の近さを実感し、地方分権の街づくりの姿を垣間見た気がしました。その日は、運のいいことに早朝の雷雨がやみ絶好のカーフリーデー日和で、すっかり定着した自動車のない街を、人々は何らかしら都市交通や環境、都



カーフリーデー前日の中心部の様子



カーフリーデー当日の中心部の様子



車いすの人々のグループ

市文化とのかかわりの中で一日様々に楽しんでいました。1997年と同様、韓国のテレビ局が取材に来ており、アジアの中でも日本はもう近隣諸国をリードする立場でなくなりつつあるのかと考えさせられました。フランスのモビリティウィークをリードするエコロジー・持続的発展省（日本の環境省に相当）からは、今年のフランスの方針と変化を伺ってきました。自治体中心から交通局や地域等これまで実施主体でなかった組織にも拡大し、新しい事業、施策展開を行う契機となる打ち上げのイベントをする参加主体も許容することにして、今年は正式参加は少なくなる一方で、参加数は大幅に増加させていました。

●フランスの交通政策

また、フランス各地で力を入れているのは、押しなべて自転車交通でした。トラム導入に象徴される公共交通優先の都市整備や、自動車の空間を削って歩行者や、公共交通、自転車の利用に転換することなど、数年前は抵抗があったことも、今では当たり前になり、成果を上げて市民も納得してきたのではないかと観察されます。この数年の変化は大きなものがあります。空間的な問題はなくなりつつあるということでしょうか、昨年から、ヨーロッパのモビリティウィークの用語と違う、「Bougez Autrement 今までとは違う交通行動を」としたのも、今度は、個人個人の交通行動に呼びかけるようになり、今年は自転車利用の促進にいっせいに目が向いたのではないかと思います。

▼リヨンのレンタサイクル▼

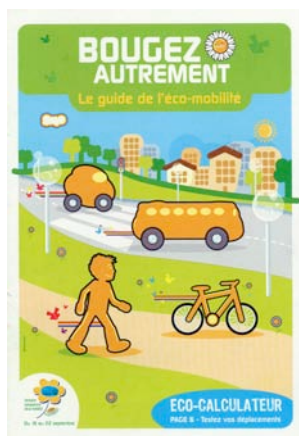
リヨンの街なかレンタサイクル「Velo'V」の成功は最近のフランスの都市交通の一番の話題です。はじめの30分は無料で、そのあとは時間精算するというものですが、スタートして1年、現在は2500台、220箇所のデポがあり、来年は4000台350箇所にするというものでした。運営主体はJC-Decaux（民間企業）ですが、広告の売り上げで、バスシェルターを設置、メンテナンスをする



市長等による新道路の
開通テープカット



福祉・交通弱者団体
等との調印式の様子



フランス「Bougez Autrement」
パンフレット



パリの「バスの廊下」
(バス・二輪・タク
シーの専用路線)



リヨンの自転車道ネ
ットワーク

という方法を生み出し、一時期ヨーロッパ中に提供していた会

社ですが、発祥の地リヨンで今度は、自転車を提供し始めました。既に数都市に拡大する勢いです。リヨンでは、4-5年ほど前から、自転車の走行空間の整備に力を入れはじめ、その環境が整った上でのシステムの成功とも思いますが、昨年から街のいたるところで赤い自転車が走り回っています。システムの成功にとどまらず、その効果として、自分の自転車を使うことが多くなってきたことが重要と皆が説明していることも印象的でした。



JC-Decaux によるレンタルサイクル
「Velo'V」



様々な人が様々な目的で利用

●総括

1997年にラ・ロッシュェルで「車のない日」に出会い、なかなか実現できないトラムや自転車を乗りやすい環境を実現するためには、車最優先の街づくり、交通政策の考え方を市民一人一人が考え直さなくては始まらないと考え、カーフリーデーはその有力な手立てになると一目で魅せられてしまいました。それから、10年車のない日、カーフリーデーを追いかけて毎年ヨーロッパの変化を見続けてきました。短い間ですが、その間、フランスの国のイベントとなったあと、カーフリーデーとしてヨーロッパのイベントとなり、モビリティウィークと発展し、世界に広がる環境、交通、文化イベントとますます進化しています。2004年から、日本担当のナショナルコーディネーターに指名されてからは、EUの下部組織ともいえるヨーロッパモビリティウィーク運営委員会の内部からも観察することが出来るようになり、日本の現状と比較するとなかなか考えさせられることがあります。その多くは大したことではないけれど、今の日本では一つ一つができないというのはどうすればいいのでしょうか。

2007年に向かって、既に各地で準備が始まっております。来年こそ、さらに普及することを期待してがんばって行きたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

ヨーロッパモビリティウィーク日本担当ナショナルコーディネーター 望月真一
(カーフリーデー・ジャパン)